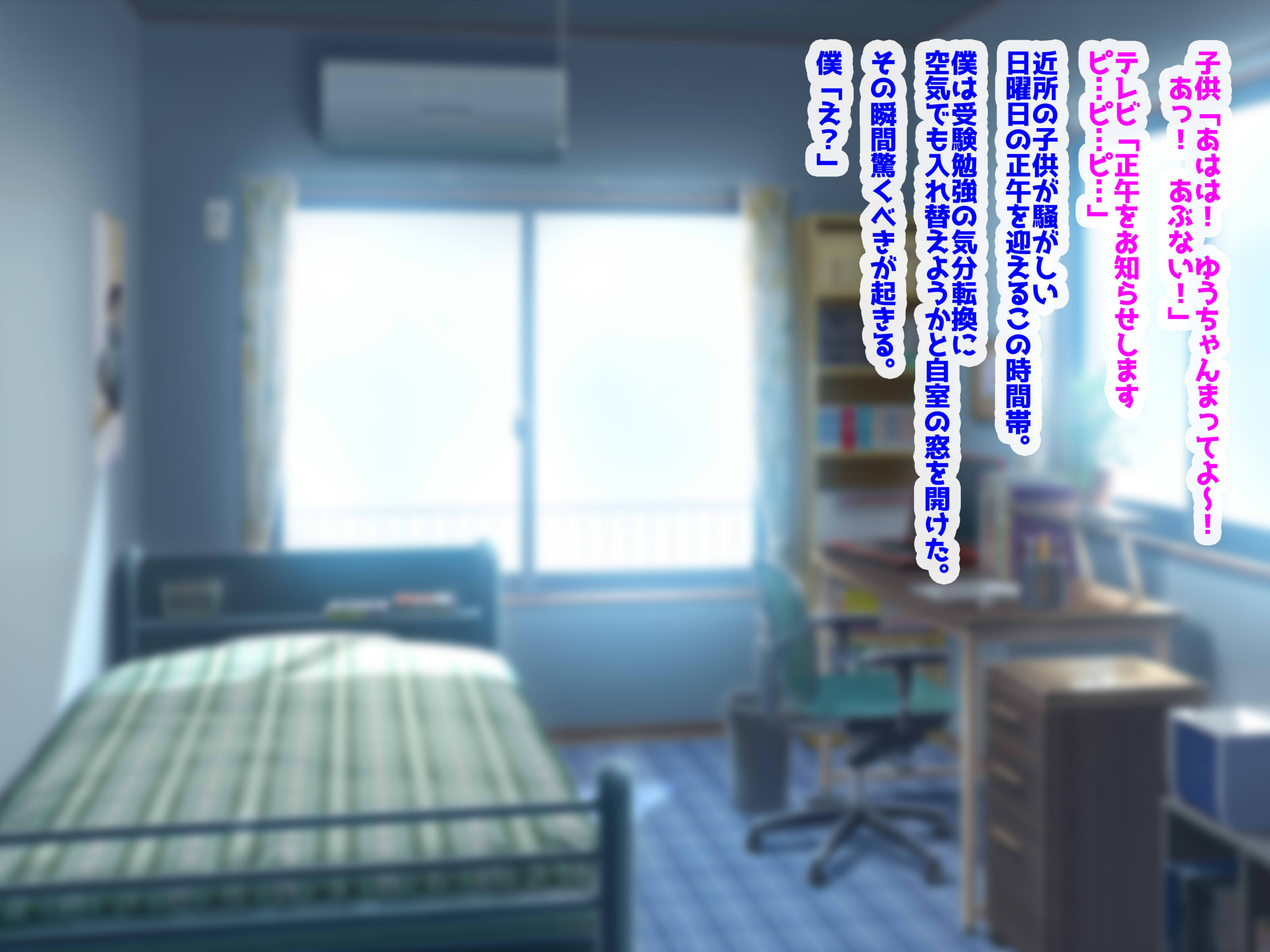

子供「あはは！　ゆうちゃんまってよ～！
あっ！　あぶない！」
テレビ「正午をお知らせします
ピ…ピ…ピ…」
近所の子供が騒がしい
日曜日の正午を迎えるこの時間帯。
僕は受験勉強の気分転換に
空気でも入れ替えようかと自室の窓を開けた。
その瞬間驚くべきが起きる。
僕「え？」

先ほどの喧騒が嘘だったかのように
音がピタリと止んだのだ。

子供「…」

テレビ「…」

時計の針は１１時５９分で止まり、
テレビの時報がポーンと鳴ることもない。

僕「な、なに？　どうなってるんだ？」

驚いた僕はドタドタと騒がしく階段を降りる。
あまりに静かな家の中では、
家族――特に妹によく怒られる僕の壮大な足音が、
打楽器のように鳴り響いていた。
僕「うそ…だよね…」

戸を開け、広がる光景に僕は目を疑った。

先ほどまで追いかけっこでもしていたであろう子供が
転んでアスファルトに体をこすり付ける直前、
空中でピタリと止まっていたのだ。

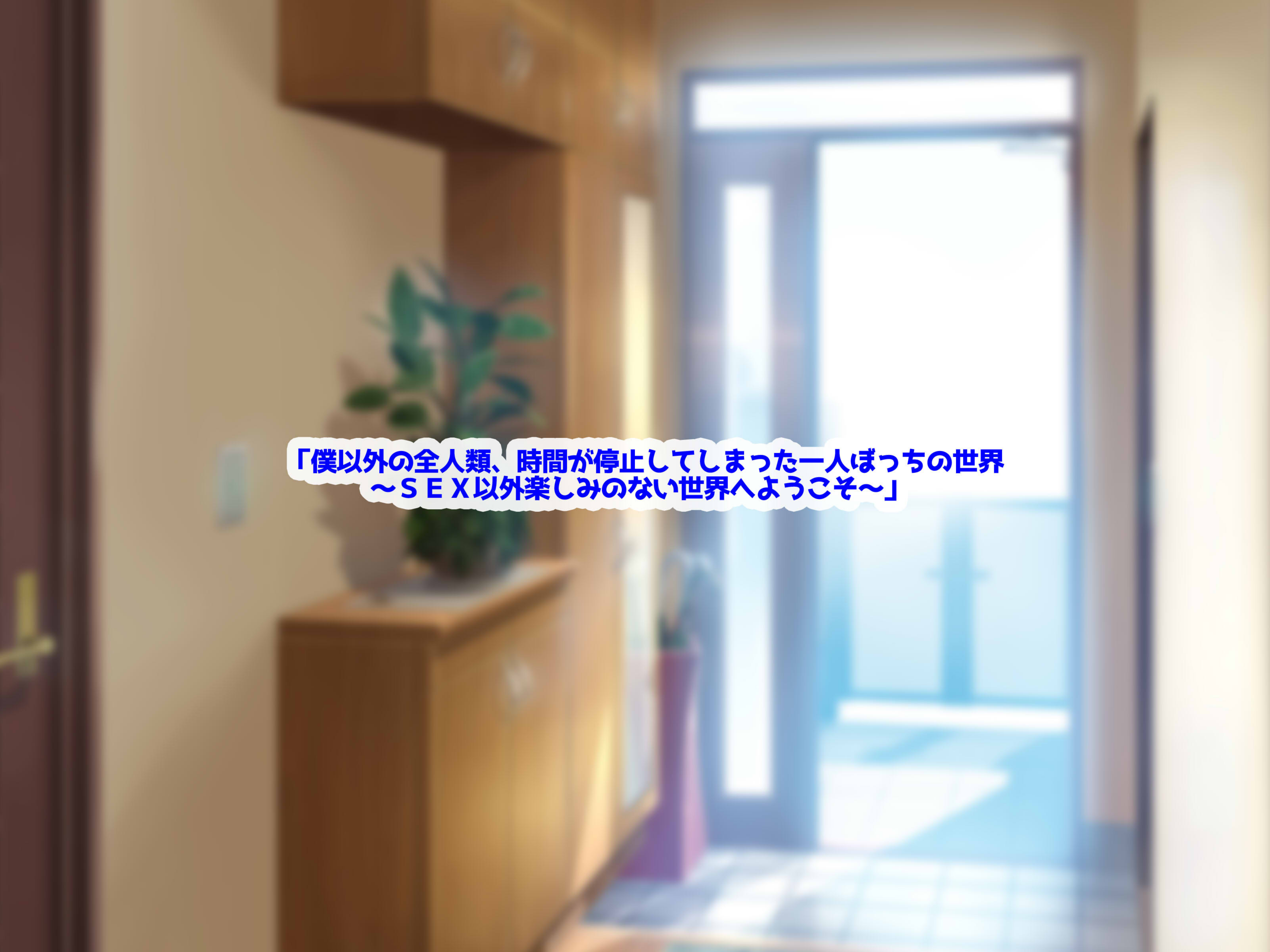
それだけではない。

辺りを見渡せば、
皆そろってピクリとも動いてはいない。

買い物帰りで自転車を漕ぐ主婦も、
ふざけながら遊びに向かうカップルも、
バスに乗り込もうとするおじいさんも
みんな揃って動いていないのだ。

僕「そんな…僕以外の…」

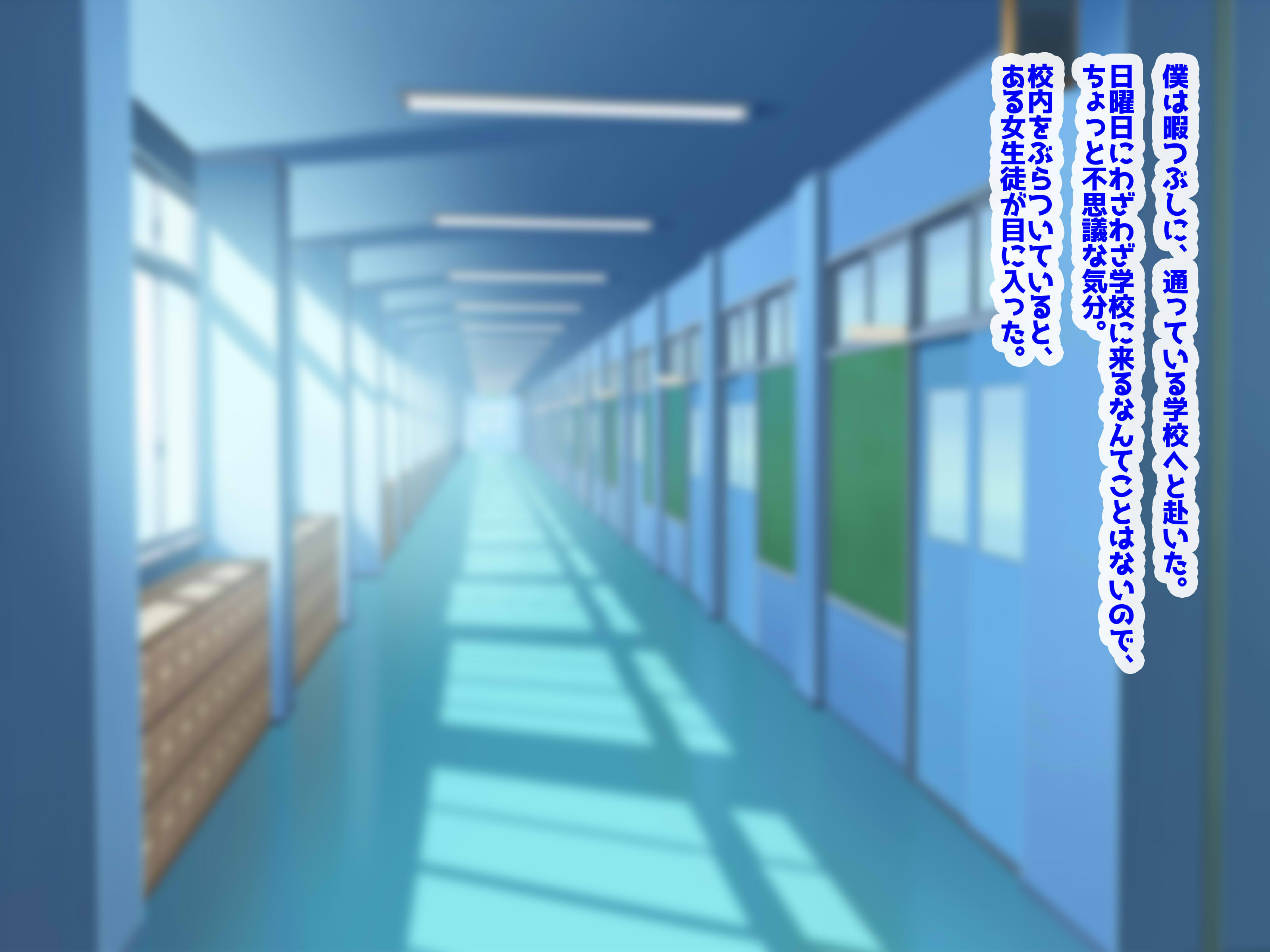
僕「僕以外の時間が…止まってる」


「僕以外の全人類、時間が停止してしまった一人ぼっちの世界
～ＳＥＸ以外楽しみのない世界へようこそ～」

～1ヶ月後～
あれから僕は、町中を走り回り、
僕以外に動ける人間がいるか探し続けた。
しかし、そんな希望を打ち消されるのに
1ヶ月という時間は十分すぎた。
照りつける太陽は僕の真上から動かない。
どう考えても僕以外の全人類、
時間が停止してしまったとしか考えられないのだ。

将来、僕は人の役に立つ警官職などに就き
食べて行きたい思っていた。
寝食忘れ、時間のすべてを使って勉強してきた。
すべては夢をかなえるために…。
しかし、人の役に立つには他に人がいなければならない…。
僕は若くして生きる希望がなくなってしまったのだ。

食べたければ、飲食物をスーパーマーケットやコンビニで
確保すればよい。
寝たければ昼から寝ていたって構わない。
勉強をする必要も、働く必要もない。
時の止まった無気力な世界で、
僕は何を糧に生きていけばいいのだろうか。
そんなことを考えていたある日…
夢も希望もなくなった世界で、
僕は唯一の楽しみを見つけてしまった。


僕は暇つぶしに、通っている学校へと赴いた。
日曜日にわざわざ学校に来るなんてことはないので、
ちょっと不思議な気分。
校内をぶらついていると、
ある女生徒が目に入った。

花見　桜（はなみさくら）ちゃん
バスケ部の部員であり
僕と同じクラスの快活な女の子だ。
そして、僕が密かに
思いを寄せている女の子でもあった。
おそらくこの時間に
学校へ来ているということは
部活の練習にでも来ていたのだろう。
「…うっ、か、かわいいなぁ」
普段、恥ずかしくて見れない彼女を
時間が止まっているのをいいことに
じっくりと眺めてしまう。
きめ細やかな肌も
透き通るような瞳もすべてが可愛らしい。
わぁ♥
かわ!!!!
なぁ♥
フゥ♥
ハァ♥
ハァ♥
ドキ♥
ハァ♥
ハァ♥
ドキ♥

「…くぅう」
彼女を間近で眺めていると、気が付かぬ内に
股間に血液が集まり、ギンギンに勃起していた。
「今なら…」
…今なら
彼女の体に触れることだって
出来るんじゃないか？
僕の中から
そんな欲望が湧き上がってくる。
「な、何を考えているんだ僕は！」
「でも…ゴクリ」
しかし僕は…
欲望が抑えきれず
桜ちゃんのやわらかく小さな体に
手を伸ばしてしまった。
なんかいいにおいがする!!♥
ハァ♥ハァ♥
ハァ♥ハァ♥

「よ、よし…触らせてもらうよ、桜ちゃん」
「う、うはぁ〜〜桜ちゃんのおっぱいやわらかぁ
こ、これが桜ちゃんのおっぱい」
「……」
「ほんとに時間が止まってるんだなぁ…
まったく動かないや」
モミ
むにゅ
モミ
むにゅ

「僕…いつもからかってくるけど
やさしい桜ちゃんに
こんなことしちゃってる……
すごい背徳感だ…」
「ゴクリ…この服の下はどうなってるんだろ…
よし…ぬ、脱がせてみよう」
「ふぅ…ネクタイとボタンを外して…と」
ドキ
ドキ
ハァ ハァ
さくらちゃん
はぅ
もっにゅ
ムニ
ムニ
もっにゅっ

「ふわぁ……や、やわらかい
桜ちゃんのおまんこのお肉
ぷにぷにしてる」
「綿のパンツの感触と合わさって
指先溶けそうだよ～～」
「はぁはぁ！　もう…
桜ちゃんの全部見てみたい！」
「全部、服を脱がしてみるよ
いいよね、桜ちゃん！」
プニ
プニ
ムニュ
ムニュ
ドキ
ドキ
うぅ
さくらちゃんのおまんこさわっちゃってる
ハァハァ
ハァハァ
たまんないよ

「うう…生で触るとやばいよ
冷たい肌が気持ちいい」
「揉んでも、柔らかくて
マシュマロみたいだ」
「はぁ／／はぁ／／
桜ちゃんの体すべすべで
触るのやめらんない」
うはぁ♥ やわらか ハァ♥ハァ♥
ビクッ
ハァ♥ハァ♥
もみっ♥
ムニュ♥
もみっ♥
ムニュ♥

「はぁはぁ…
気持ちよかったぁ♡♡」
「桜ちゃんが
僕のザーメンまみれになってる」
「こんなエッチな姿見せられたら
もうこれ以上抑え切れない♡♡
桜ちゃんで童貞卒業したい…」
「ザーメンでドロドロの
桜ちゃんおまんこに
僕の童貞チンポ挿入れたいよ♡♡」
「桜ちゃん、い、いいよね
挿入れちゃうよ♡♡」
どろっ
どろっ
どろぉ
ハァハァ
ビクッ
ニュコッ
シコッ
キュン
キュンッ
シコシコッ
シコッ
フゥーっ
フゥーっ

ドキ♥
「わっ、軽いなぁ
桜ちゃん///」
「はぁはぁ、桜ちゃん…
うぅっ…このまま
抱えたまま…
童貞チンポ///
挿入れさせてもらうからね」
「ほら、ちんぽ挿入るよ
桜ちゃんで童貞卒業しちゃうからね」
「あっ///
んっ！ あぁっ！」

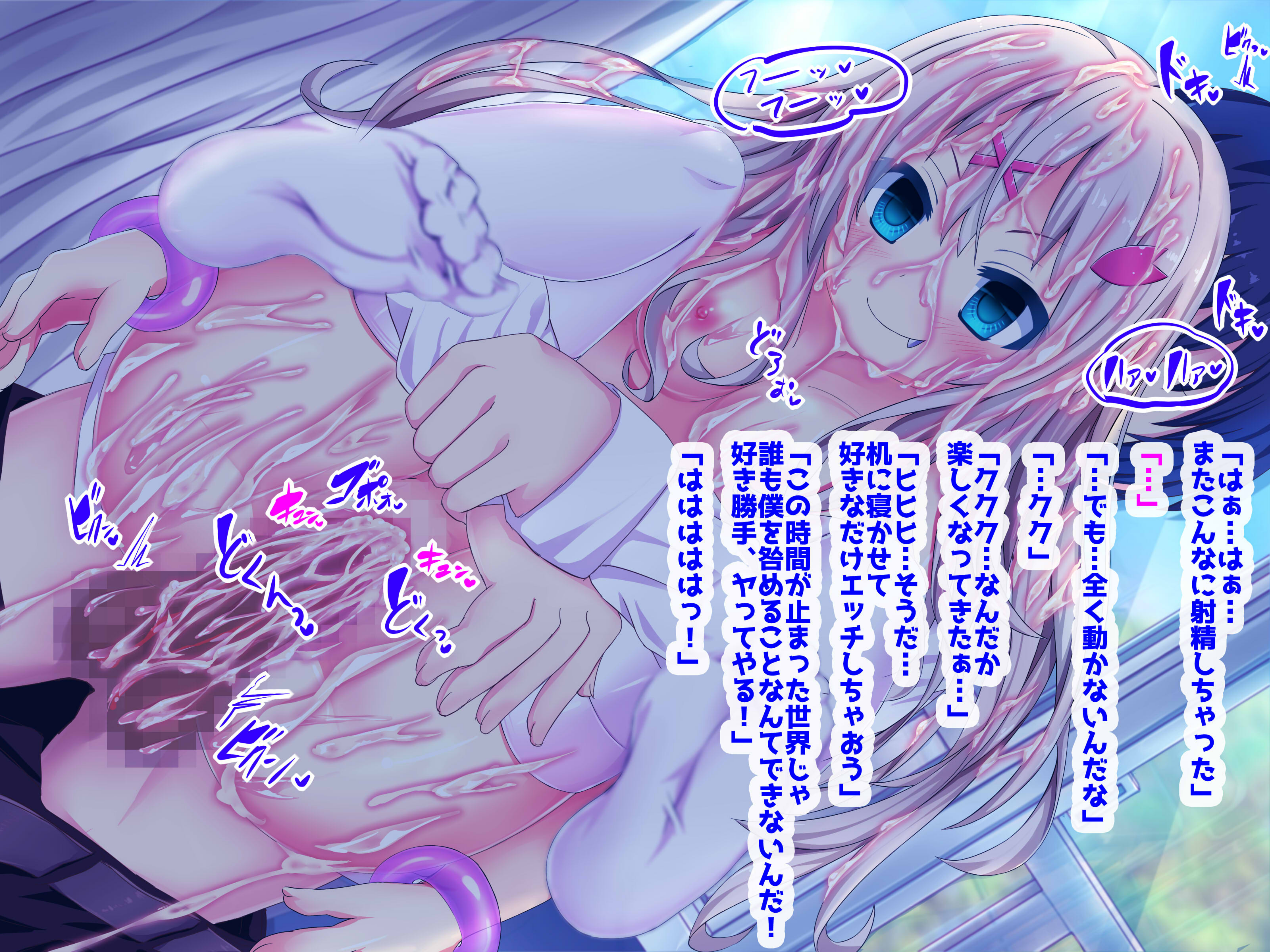
「ああっ！ 桜ちゃん！ 桜ちゃん！ 射精るぅ！ 射精るよ！
ザーメンさっきみたいに
ドクドク射精しちゃうよ！」
「このまま、桜ちゃんの膣内に
勝手に中出ししちゃうからね！」
「あっ！！ あああっ！！
イくよ！！ いっぱい射精すから
ちゃんと受精してね！ 桜ちゃん！」
「ああっ！ くぁああ！」

さくらちゃんに♥ナカだしっ♥うぅっ イクっ♥ イクぅっ♥
あぁっ♥ でたぁ うぅっ♥
「うっ！ うぅっ！ 桜ちゃん！桜ちゃんの処女おまんこに初めてザーメン送ってるよ！」
「ああっ！ まだ出る！桜ちゃんの膣内僕のチンポ締め付けてザーメン搾り取ってるぅ！！」
「孕んで！ 僕の大量ザーメンで受精して」
びゅるるるる♥
ビュクッ
ドクッ
ビュクッ
ドクッ
びゅぐっ
ビクッ

「はぁはぁ…出しちゃった…
桜ちゃんのおまんこに濃い生ザーメン…
いっぱい中出ししちゃったぁ…」
「わぁ～～
射精したザーメン
桜ちゃんの小っちゃいおまんこじゃ
全然収まらないよ」
「桜ちゃんのエッチ汁と
合わさってどんどん零れ落ちてきちゃってる」
ビクっん
はぁ♡はぁ♡
いっぱいでたぁ♡
ハァ♡ハァ♡
どろっ♡
どろっ♡
どろっ
どくん♡
キュン
ビクっ♡
キュン
どくん♡
ビクっ♡
どろっ

んっ…ハァッ!?
うっ…うっ…
「はぁ…はぁ…
くっ！ まだ〜〜
勃起がおさまらないよぉ〜〜」
「桜ちゃんもおまんこ
きゅうきゅう締めつけてて
全然僕のチンポ離そうとしないね」
ヌッポっ…
グチュ…
キュ
キュ
グチュ…
ヌッポ

ドキッ
ビグっ…ん
ザーメン ナカに だすよっ ハァハァ♥
ドキッ
うっあっ あっ♥ またでるっ♥
「こんなに激しくしてたら
またチンポ汁射精ちゃいそう！」
「あっ！ あぁっ！
桜ちゃんまた、膣内にビュクビュク
射精しちゃうよ」
「濃いザーメンまたおまんこのナカで
ビューするね！」
「あっ！ んっ！ ぐっ！
射精る！ あぁっ！
桜ちゃんに！ 中出しっ！」
パンッ♥
キュ♥
プチュ♥
キュ♥
グチュ♥
グチュ♥
パンッ♥
プチュ♥


フーッ♥
フーッ♥
ドキ♥
ドキ♥
ハァ♥ハァ♥
どろぉ♥
「はぁ…はぁ…またこんなに射精しちゃった」
「…」
「…でも…全く動かないんだな」
「…クク」
「ククク…なんだか楽しくなってきたぁ…」
「ヒヒヒ…そうだ…机に寝かせて好きなだけエッチしちゃおう」
「この時間が止まった世界じゃ誰も僕を咎めることなんてできないんだ！好き勝手、ヤってやる！」
「はははははっ！」
ゴポォ
キュン
どくんっ♥
キュン♥
どくっ